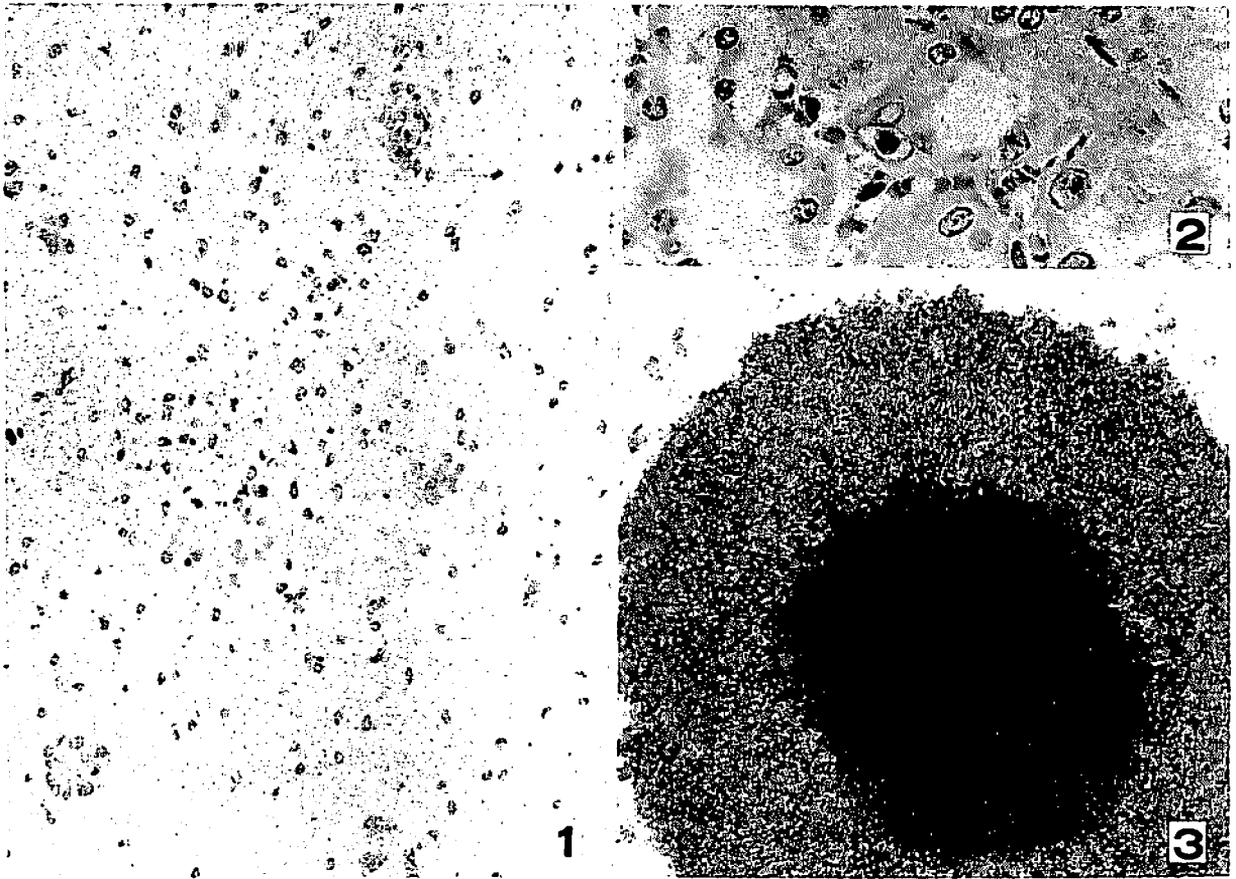


# サルの脳と腎臓

岐阜大学農学部家畜病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会標本No.457



**動物：**赤毛ザル，雌，young。

**臨床事項：**公園にて飼育中の猿が十数頭にも増えたため，昭和59年5月仔猿3頭を残し処分した。本症例は同年9月21日，時々，脱力症状を呈し，木から落ちるなどの異常を示した。9月25日午前中は元気にしていたが，午後になり急にぐったりしてきたため，診察を依頼したがすでに斃死していた。なお，同居の1頭も同年8月中旬に本例と同様の症状を呈し斃死している。他の1頭には著変は認められない。

**剖検所見：**盲腸における鞭虫数隻の寄生の他著変は認められなかった。

**組織所見：**大脳における変化は，提出標本（A，前頭葉前額断）に見るように白質に広く認められる脱髓果の多発と，星形グリアの肥大増殖から成る限局性グリア瘢痕巣（写真1，H・E染色， $\times 200$ ）及び後頭葉灰白質の錐体細胞の脱落につづくヒマン性肥大グリア増殖，並びに，これら脱髓果に近接して見られる毛細血管の内皮細胞及び外膜細胞の増殖をともなう毛細血管自己の増殖によって特徴づけられた。一方，内臓では光顕的に，腎臓（提出標本B）尿細管上皮及び肝細胞の核内に中心部に

coreを有する好酸性の封入体が認められた（写真2， $\times 400$ ）。この核内封入体は，電顕的には，中心部の電子密度の高い均質無構造のCoreを取り囲み，線維性物質が網状に密に配列するという特徴的な構造（写真3， $\times 34,500$ ）を示し，この所見は鉛中毒の際に出現するlead inclusion bodyに極めてよく一致するものであった。その他内臓には特記すべき変化は得られていない。

以上のように，本症例では，尿管細管上皮及び肝細胞の核内に光顕的，電顕的にlead inclusion bodyとよく一致する封入体が認められ，鉛中毒の存在が強く疑われた。しかし，本症例の大脳病変には，主として，白質に肥大グリア増殖と毛細血管壁の変化を伴うグリア瘢痕巣が全脳的に見られるにすぎず，脳実質の水腫，脳軟膜の肥厚及び鉛顆粒の沈着等を欠き，又，末梢神経の変化も欠いており，鉛脳症を満足させるに十分な所見は得られていない。従って，本症例の大脳病変を鉛脳症と言うにはいささか無理があるように思われる。よって，提出標本の組織診断名としては鉛中毒を疑う脳症及び腎症と言うにとどめたい。